

## 〈資料紹介〉日本の「猿の生き肝」

——口承資料が示す特徴——

邊 恩 田

はじめに

先に報告した「東アジアから見た日本の「猿の生き肝」と韓国の「兎伝」<sup>①</sup>」において、筆者は、日本の「猿の生き肝」と韓国の「兎伝」<sup>①</sup>の諸本をとりあげ、東アジアの視点をもって比較考察を行った。

前稿では、「猿の生き肝」の淵源と考えられてきたインドの古文獻と、中国において漢訳された仏典などの文献資料をふまえ、朝鮮半島・韓国と、日本における文献資料を取りあげて、その種々相について比較の視点から考察したのであった。<sup>②</sup>

### 一 口承資料

それを受けてここでは、日本の「猿の生き肝」について、これま

でに報告されてきた多くの採録話資料（『日本昔話名彙』『日本昔話集成』『日本昔話大成』『日本昔話通観』など）を集めて整理し、日本の口承伝承が示すさまざまな様相について見ていくことにする。

これまでに管見に入った口承資料は、一六四話である。口承の「猿の生き肝」<sup>③</sup>は、現在までのところ合計一六四話あることが確認できている。

### 二 口承伝承の種々相

さて、これら一六四話の「猿の生き肝」の内容を詳細に検討しながら、対比・比較するのに有効な項目を設定し、表に作成した。その項目については、前稿で表に挙げた、場の設定、理由（誰の病気か）、何を、誰が、目的を告げる者、形状由来、という項目に拠っているが、あらたに注目すべきと考える二項目を追加している。

以下、この項目にそつて、日本の口承資料が示す特徴を簡略に見ていくことにする。

## 1 場の設定

物語の場、空間をどこに設定しているかであるが、一六四話中、

龍宮 一三三話

であった。「海底の宮殿」という表現を龍宮と見なしてよいなら一三四話となる。圧倒的な多さである。そして単に「海」は、

海 一五話

であった。これは北海道の五話すべてと、南島沖繩県に多く見られた。

このほか、「淵」「島」が一話ずつあった。龍宮だとわざわざ語っていない17番や112番・113番の場合、「乙姫」がすぐ登場していることからすれば龍宮とみなしてよいかと思われる。とすれば、「龍宮」は一三七話になる。

興味深いのは、人間がくらす世の中、つまり世間における話に設定しているものが、六話あったことである。

すなわち「ある村」「大家」「ある家」などであるが、空想上の世界「龍宮」ではなく、身近な世間におけるはなしに替わっている。

したがつて、病気で登場するのも乙姫や龍王などではなく、「殿様

の奥さん」(23番)や、「一人息子」(82番)、「長者の妻」(92番)、「分限者の姫」(107番、108番)、「爺」(123番)、「女の子」(129番)であつて、場の設定に見合つた人物に替わっている合理化も見られた。世俗化した話とみなせよう。

## 2 理由

誰の病気を治す薬なのか、探し求めに行く理由については、

乙姫 一〇七話

となり最も多い。単に「姫」とするものや「娘」とするものも含められている。場が「龍宮」であれば、姫といえは「乙姫」のことを指し、娘といつても「乙姫」とみなしてよいだろう。

乙姫の病気という設定は、日本の文献資料の場合と同じであつて、乙姫が、日本の大きい特徴といえることが、口承資料からも確認されることとなつた。そして、

龍王 二二話(「王」・「大王」)「龍宮様」を含む)

となり、次に多いことがわかつた。このほか「海の神」が五話あつて、これは沖繩県に多く見られた。

ここで注目すべきことは、理由が「病気」ではなく、妊娠して食べたい、あるいは安産のためとする資料で、インドのジャータカやパンチャタントラにおける話と同じ設定が見られたことである。12

番・14番（宮城県）の乙姫の安産のため、22番（山形県）の亀のお産、65番（福井県）の雌蛇の難産、110番（山口県）の龍王の奥方の妊娠、などである。

日本では、文献資料『注好選』や『今昔物語集』『沙石集』に、漢訳仏典から受容したと判断できる内容が見られたのであるが、このように、口承の採録話にもあつたことが判明した。これは、書承からの影響・受容というケースと考えられる。書承から口承へという伝承の流れがあることを、注意深く検討する必要がある。

### 3 何を——探し求めるのは何か

探し求めるのは、一五九話すべてが「猿の生き肝」（一話のみ心臓）である。ただし、先行研究で指摘があつたように北海道の五話だけは、「兎」である。

### 4 使者は誰か

猿の肝を求めて出発する使者は誰なのか。「亀」が圧倒的に多い。

亀 八八話

くらげ 四五話

で、くらげが次に多い。ある。また「たこ」が八話、「河童」が三話、「鮭」と「ひらめ」が二話ある。北海道だけに見える「トド」

もある。

このほか「わに」が二話（兵庫県）あつたのは、インドの古代説話と同じで、書承からの影響かと考えられる。九頭竜川の「雄蛇」（65番）もそのなごりであろうか、興味深い。

そして、くらげが使者であるのは、次項に強く関わる設定である。

### 5 目的を告げたのは誰か

猿（あるいは兎）を探しだし、龍宮へ首尾良く誘うのに成功した使者は、残念なことに猿を逃してしまふ。それは、本当の目的が猿の肝であることをうっかり告げてしまったからである。話がらによって、この行為を「もらす」「教える」「告げる」というように、さまざまに表しているのが採録話に確かめられた。

使者自身が告げてもらしてしまふのが、古い伝承であることは、古代インド説話や漢訳仏典類に認められることである。

ところが、告げてもらったのが、使者とは異なっている場合が、意外にも多いことがわかった。

くらげ 八二話

たこ 三五話

であり、最も多い。「ひらめ」が六話、「いか」が四話、「こんぺ」が三話、「なまこ」「わに」が二話で、こどら・ふぐ・かに・かわは

ぎが各一話ずつになる。

ところで、告げてもらった「くらげ」や「たこ」「ひらめ」などが、<sup>〃</sup>門番<sup>〃</sup>である点こそは、最も注目されることである。むしろ門番とは、龍宮の入り口の門番である。

#### 門番 二〇話

前稿の文献資料の検討でわかったように、<sup>〃</sup>門番のくらげ<sup>〃</sup>は、室町期の資料まで遡ることができ、江戸期の絵本で流布していたことが、思い起こされる。使者ではなく、門番がもらったという展開こそが、日本独自の特徴であるからで、口承にもそれが確認できた。

#### 6 途中で戻るかどうか

本当の目的が自分の肝であったことを知った猿は、たくみに嘘を言いつくろって、窮地から抜け出すことに成功するのだが、命拾いをした賢い猿、猿の知恵が、このはなしのテーマではあった。このように、猿は、龍宮に着く前に途中で、または龍宮の中に入ることなく、もとの陸地に戻るのであるが、龍宮でごちそうされ接待されてから戻るといふ話の設定もあるため調べてみると、表に○を付したように、途中で戻るのは一〇六話であった。

この展開が、「猿の生き肝」の古い、素朴な伝承の姿であろうと、筆者は考えている。

#### 7 言い訳——肝はどこにあるか

さて、では賢い猿は、自分の肝がどこにあると嘘をつき言い訳をしたか、肝の置き場所を調べたところ、表に見るように、

#### 木 九七話

であった。木の枝、木の上、木の頂き、松の木に、等々さまざま表現を含めた数字であるが、圧倒的に木が多い。木に登れる<sup>〃</sup>猿<sup>〃</sup>であるから、木に干した（置いた）というのも納得でき合理的ではあるが、これは、古くジャータカに見える設定であった。このほか、

#### 陸 七話

#### 山 一〇話

#### 岩 五話

となるが、「岩」に関しては、猿には似つかわしくない。

「岩」は、朝鮮半島の伝承に重要な要素としてあり、その比較検討が求められる。

#### 8 形状由来の有無

最後に、猿を逃してしまった罰をうけることになるが、それがすべて生物の形状の由来になっている。

5項で見えてきたが、目的を告げてもらったのは、くらげ、たこ、いか、ひらめなどであるが、くらげが圧倒的に多く、一六四話中、

形状由来を語るのは一三五話にのぼることが確認された。

この「猿の生き肝」の話が「くらげ骨なし」とも伝承されている  
所以である。しかし山口県・鹿児島県・沖縄県の話は「たこ」の骨  
なしに変じている。

なぜ骨がないのかという理由を、おもしろおかしく語り聞かせる  
話として、くらげやたこは、数ある生き物のなかでも、最も説得力  
があったことが確認できる。

#### 注

- ① 『説話・伝承学』第21号、二〇一三年三月
- ② 筆者は、説話・伝承学会二〇二二年度春季大会（四月二八日 於・京  
都女子大学）において口頭発表を行った。
- ③ 日本の「猿の生き肝」については立石展大氏「猿の生き肝」の変遷」  
〔昔話と呪物・呪宝―昔話―研究と資料―25号、平成9〕があった。  
韓国の「兎伝（トッキジョン）」とあまりにも似ていて、大学の講義で  
も取りあげ資料のカード作りを学生達と進めたが、長い間まとめず中途  
で資料を置いたままであった。学会発表後入手困難であった口承資料を  
集めて今回まとめるに至った次第である。ところが二〇一三年の秋に立  
石氏の著書があることを知った。そこには氏の旧稿になかった表（一四  
五話）が示してあった。
- ④ 注①の拙稿で論じた。

#### 表掲出資料の出典一覧

- 〔日本昔話通観〕掲載の資料を用いたものは括弧に「通観」と略記  
し巻数・頁を示した）
- 1 杉村キナラブック『キナラブック・ユーカラ集』一九六九（通観・1  
巻、一〇二〇頁）
  - 2 更科源蔵『アイヌ民話集』北書房、一九六三
  - 3 久保寺逸彦『昔話研究資料叢書 別巻 アイヌの昔話』三弥井書店、  
一九七一
  - 4 浅井亨『日本の昔話2 アイヌの昔話』日本放送出版協会、一九七二
  - 5 萱野茂『キツネのチャランケ』小学生日本の民話、小峯書店、一九七  
四
  - 6 佐々木徳夫・加藤瑞子『日本の民話2 東北1』ぎょうせい、一九七  
八
  - 7 能田多代子編『日本の昔話7 てつきり姉さま―五戸の昔話』未来  
社、一九五八
  - 8 國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸 第五号 下北地方昔話集』一  
九六七・三
  - 9 『腸野沢村史 民俗編資料集』腸野沢村役場、一九六三
  - 10 宮本朋典『木造町のむがしコ集』木造町教育委員会、一九八四
  - 11 渡辺全忠『さわのむがすっコ』玖光堂、一九七四（通観・4巻、六  
七三頁）
  - 12 佐々木徳夫『全国昔話資料集成 29 陸前昔話集』岩崎美術社、一九七  
八
  - 13 佐々木徳夫『昔話研究資料叢書 15 陸前の昔話』三弥井書店、一九七  
九
  - 14 佐々木徳夫『日本民話 みちのくの海山の昔』講談社、一九七五

- 15 佐々木徳夫『日本の昔話 11 永浦誠喜翁の昔話』日本放送出版協会、一九七五
- 16 今村泰子『日本の昔話 20 羽後の昔話』日本放送出版協会、一九七七
- 17 寺山千枝子『男鹿羽立の昔話(上)』『昔話——研究と資料』一二号、三弥井書店、一九八二
- 18 荻生田憲夫『小僧ッ子と鬼婆』上山市郷土史研究会、一九六五(通観・6巻、八七二頁)
- 19 武田正『佐藤家の昔話』桜楓社、一九八二
- 20 19に同じ
- 21 武田正『羽前の昔話』日本放送出版協会、一九七三
- 22 武田正『牛方と山姥』海老名ちやう昔話集『海老名正二、一九七〇
- 23 野村純一『酒田の昔話』酒田市、一九七六
- 24 野村純一他『飽海郡昔話集』荻野書房、一九七九
- 25 通観・7巻、八五七頁(遠藤稿本)
- 26 梁川町史編纂委員会『梁川町史12 伝え民俗編Ⅱ』一九七九
- 27 『群馬県史資料編 27 民俗』一九八〇
- 28 ふじかおる『海女の語る民話』『民話の手帖』7(通観・9巻、五八一頁)
- 29 高橋在久『日本の民話26 房総の民話』未來社、一九六〇
- 30 『全国昔話資料集成 20 武蔵川越昔話集』岩崎美術社、一九七五
- 31 関敬吾編『日本昔話大成1』二五八〜九頁
- 32 東京都大田区教育委員会『大田区の文化財 第22集』一九八六
- 33 松代高等学校文芸部『くびきの民話』一、一九六七(通観・10巻、九二九〜九三二頁)
- 34 水沢謙一『とんと昔があったけど——越後の昔話』日本の昔話2第二集、未來社、一九五八
- 35 水沢謙一『ろばたのトントムカシ——小千谷の昔ばなし』野島出版、一九七一
- 36 水沢謙一『ばばさのトントムカシ——波田野ヨスミの語る百話』野島出版、一九七六
- 37 羽田啓次『村の風土記5——とんと昔物語』一九七五(通観・10巻、九三二頁)
- 38 水沢謙一『日本の昔話第一集 とんと昔があったけど——越後の昔話』未來社、一九五七
- 39 新潟県立村松高等学校学生会クラブ『五泉の民話』中村書店、一九六八
- 40 佐久間惇一『全国昔話資料集成2 新潟・北蒲原昔話集』岩崎美術社、一九七四
- 41 水沢謙一『雪国の炬ばた語り——越後・栃尾郷の昔話』名著刊行会、一九八三
- 42 水沢謙一『あったてんがの——下條登美の100話』厚徳社、一九八八
- 43 水沢謙一『日本の昔話 8 いきがポーンとさけた——越後の昔話』未來社、一九五八
- 44 水沢謙一『ふるさとの夜語り——長岡・東山の昔話』野島出版、一九七三
- 45 水沢謙一『おばばの夜語り——新潟の昔話』平凡社名作文庫6、平凡社、一九七八
- 46 水沢謙一『雪国のおばばの昔——日本民話』講談社、一九七四
- 47 水沢謙一『日本の昔話 8 いきがポーンとさけた——越後の昔話』未來社、一九五八
- 48 水沢謙一『おばばの昔ばなし——池田チセ(75才)の語る百四十話』野島出版、一九六六
- 49 水沢謙一『昔あったてんがの——宮内昔話集』一九五六。『全国昔話

- 〔資料集成〕 22越後宮 内昔話集』岩崎美術社、一九七七（改訂版）
- 50 『村松のむかし話』村松町史資料編 第5巻、一九八一
- 51 水沢謙一『雪国の夜語り——越後の昔ばなし』野島出版、一九六八
- 52 水沢謙一『日本の昔話 8 越後の昔話』日本放送出版協会、一九七四
- 53 新潟県立松代高等学校文芸部『くびきの民話』三、一九七八（通観・10巻、九三四頁）
- 54 浜口一夫『鶴女房——佐渡の昔話』桜楓社、一九七六
- 55 水沢謙一『日本の民話 3 越後の民話』未來社、一九五七
- 56 國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸 第三号 岩船地方昔話集』一九六五、三
- 57 大谷女子大学説話文学研究会『両津市昔話集 下』一九七〇
- 58 57に同じ
- 59 大谷女子大学説話文学研究会『神林村昔話集』一九八六
- 60 関敬吾『日本昔話集成 第一部・動物昔話』角川書店、一九五〇
- 61 山古志村史編集委員会『山古志村史 民俗』山古志村役場、一九八一
- 62 伊藤曙寛『昔話研究資料叢書 6 越中射水の昔話』三弥井書店、一九七一
- 63 氷見の民話編集委員会『氷見の民話』一九八〇
- 64 『小松市の昔話』小松市教育委員会
- 65 『昔話研究』1—8、（杉原丈夫他『若狭・越前の民話』一九六六。杉原丈夫他『若狭・越前の民話』未來社、一九六八）
- 66 國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸 第十号・丹波地方昔話集一九七三・六
- 67 小澤俊夫・福原登美子・森野郁子『日本の民話 5 甲信越』ぎょうせい、一九七二
- 68 一ノ瀬義法『伊那のむかし話』伊那毎日新聞社、一九七八
- 〔資料紹介〕 日本の「猿の生き肝」
- 69 澤田四郎作『丹生川昔話集』一九三九、『続飛騨探訪記』（通観・13巻、六一六頁）
- 70 山本節・永田典子・山田八千代『昔話研究資料叢書 18 西三河の昔話』三弥井書店、一九八一
- 71 京都府立総合資料館『丹後伊根の昔話』一九七二
- 72 岡節三・笠井典子『日本の昔話 7 近畿』ぎょうせい、一九七九
- 73 京都府立総合資料館『山城和束の昔話』一九八二
- 74 岩田準一『鳥羽志摩の民俗』一九七〇
- 75 『近畿民俗』1—4、近畿民俗学会、一九三六
- 76 宮本常一『とろし』一九三六、『大阪の昔話——夢のしらせ』現代創造社、一九八一
- 77 岩田準一『鳥羽志摩の民俗』一九七〇
- 78 関敬吾『日本昔話集成 第一部・動物昔話』二二三頁、角川書店、一九五〇
- 79 『口承文学の会』『口承文学』9（通観・15巻、四二一頁）
- 80 京都女子大学説話文学研究会『美方・村岡昔話集』一九七〇（通観・16巻、五五三頁）
- 81 柴口成浩『東瀬戸内の昔話』日本放送出版協会、一九七五
- 82 80に同じ
- 83 通観・17巻、九二六頁
- 84 『昔話——研究と資料』2、三弥井書店、一九七三
- 85 関西外国語大学短期大学民俗学研究会『郡家町・八東町の昔話』一九八二・三
- 86 大谷女子大学説話文学研究会『気高町昔話集』一九八五
- 87 鳥根県立隠岐島前高等学校郷土部編『島前の伝承』4号、一九七六、九

- 88 森脇太一『昔話の研究 第二編 岩見昔話』一九四二  
通観・18巻、八〇七頁
- 89 民話と文学の会『季刊民話』3、一九七五
- 90 藤原節子『とんとんむかし——藤原千代子の昔話』一九七三（通観・  
18巻、八〇七頁）
- 91 鳥根県立隠岐島前高等学校郷土部編『島前の伝承』2号、一九七六
- 92 石井民司『日本全国国民童話』同文館、一九一一
- 93 『近藤昔話稿』No.5、一九七五（通観・18巻、八〇九頁）
- 94 高木敏雄『日本伝説集』東京武蔵野書院、一九四三
- 95 白田甚五郎監修・酒井董美編『魚屋と山姥——隠岐・島前の昔話』桜  
楓社、一九八〇
- 96 鳥根大学昔話研究会『鳥根半島漁村民話集1』一九八一・六
- 97 97に同じ
- 98 97に同じ
- 99 97に同じ
- 100 鳥根大学昔話研究会『鳥根半島漁村民話集II』一九八二・三
- 101 100に同じ
- 102 100に同じ
- 103 100に同じ
- 104 稲田浩二・立石憲利『昔話研究資料叢書 8 奥備中の昔話』三弥井書  
店、一九七三
- 105 稲田浩二・立石憲利『中国山地の昔話』三省堂、一九七四
- 106 稲田浩二・立石憲利『奥備中稿』一九七三（通観・19巻、八八八頁）
- 107 広島女子大学国語国文学研究室『広島県上下町昔話集』溪水社、一九  
八三
- 108 山陽学園短期大学昔話同好会「上下稿」一九七六（通観・20巻、八三  
七頁）
- 109 宮本常一『周防大島昔話集』大島文化研究連盟、一九五六
- 110 松岡利夫『日本の民話29 周防・長門の民話』未來社、一九六〇
- 111 桜井和雄『全国昔話資料集成 23 土佐昔話集』岩崎美術社、一九七  
七
- 112 立命館大学説話文学研究会『高知・西土佐昔話集』一九八三
- 113 京都女子大学説話文学研究会『三間稿』一九七二（通観・22巻、六七  
一頁）
- 114 大谷女子大学説話文学研究会『広見町昔話集』一九七四、三
- 115 和田浩二『日本の民話 10 四国』ぎょうせい、一九七九
- 116 大谷女子大学説話文学研究会『浅川・川東昔話集』一九七三
- 117 116に同じ
- 118 宮地武彦『日本の民話 71 佐賀の民話 第2集』未來社、一九七八
- 119 宮地武彦『昔話研究資料叢書 肥前伊万里の昔話と伝説』三弥井書店、  
一九八六
- 120 宮地武彦『蒲原タツエ唄の語る843話』三弥井書店、二〇〇六
- 121 通観・23巻、七九二頁
- 122 木村祐章『全国昔話資料集成 6 肥後昔話集』岩崎美術社、一九七四
- 123 山口麻太郎『全国昔話記録 宍粟島昔話集』三省堂、一九四三
- 124 123に同じ（『日本昔話記録 13 長崎県昔話集』）
- 125 國學院大学『方言誌』二二輯、一九三九、一〇（通観・24巻、七〇三  
頁）
- 126 『昔話研究』2—5、一九三六、九
- 127 『昔話研究』1—10、一九三六、二
- 128 文英吉『奄美大島物語』南島社、一九五七
- 129 田畑英勝『日本の昔話 7 奄美諸島の昔話』日本放送出版協会、一九  
七四

- 130 岩倉市郎『日本昔話記録 12 鹿児島県喜界島昔話集』三省堂、一九七〇(二頁)
- 131 有馬英子『福島ナオマツ昔話集』一九七三(通観・25卷、八三五頁)
- 132 柳田国男『日本昔話記録 11 鹿児島県奄美島昔話集』三省堂、一九七三
- 復刊
- 133 下野敏見『日本の民話 37 屋久島の民話』未來社、一九六四
- 134 下野敏見『日本の民話 34 種子島の民話』未來社、一九六六
- 135 田畑英勝『全国昔話資料集成 15 奄美大島昔話集』岩崎美術社、一九七五
- 136 田畑千秋『南島文化叢書 23 奄美大島の口承説話——川畑豊忠翁、二十三夜の語り——』第一書房、二〇〇五
- 137 八重山文化研究会『八重山文化論集』一九七六(通観・26卷、七九九頁)
- 138 立命館大学・大谷女子大学・沖縄国際大学合同調査報告「石垣稿」(通観・26卷、八〇〇頁)
- 139 NHK 沖縄放送局一九七九—一九八一年(通観・26卷、八〇〇頁)
- 140 138 に同じ(通観・26卷、八〇〇頁)
- 141 138 に同じ(通観・26卷、八〇一頁)
- 142 138 に同じ(通観・26卷、八〇一頁)
- 143 138 に同じ(通観・26卷、八〇一頁)
- 144 『琉球新報』一九七六年八月二七日号(通観・26卷、八〇一頁)
- 145 沖縄国際大学口承文芸研究会『口承研究』2(通観・26卷、八〇二頁)
- 146 読谷村教育委員会『伊良皆の民話 読谷村民話資料集1』一九七九(通観・26卷、八〇二頁)
- 147 那覇民話の会『那覇の民話資料 第1集』一九七九(通観・26卷、八〇三頁)
- 148 那覇民話の会『那覇の民話資料 第2集』一九八〇(通観・26卷、八〇三頁)
- 149 沖縄民話の会『沖縄民話の会会報2』一九七六(通観・26卷、八〇三頁)
- 150 琉球大学沖縄文化研究所『宮古諸島学術調査報告言語・文化編』一九六八(通観・26卷、八〇三頁)
- 151 琉球大学民俗研究クラブ『沖縄民俗19』一九七二(通観・26卷、八〇三頁)
- 152 沖縄民話の会『沖縄の民話資料第1集』一九七八(通観・26卷、八〇三頁)
- 153 沖縄国際大学口承文芸研究会『沖縄昔話資料上』(通観・26卷、八〇四頁)
- 154 『上野村誌』(通観・26卷、八〇四頁)
- 155 154 に同じ
- 156 宮古民話の会『ゆがたい・宮古島の民話第2集』一九八〇
- 157 156 に同じ、第4集
- 158 上勢頭亨『竹富島誌——民話民俗編』法政大学出版局、一九七六
- 159 福田晃他『南島昔話叢書 9 竹富島・小浜島の昔話』同朋社、一九八〇
- 160 159 に同じ、一二八頁
- 161 159 に同じ、一二八頁
- 162 159 に同じ
- 163 伊是名村教育委員会『いぜなの民話』一九八三
- 164 狩俣恵一『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』三弥井書店、二〇〇三

〈資料紹介〉日本の「猿の生き肝」

〔付記〕 初校時と再校時までに入手した資料七話を表に収めることができ

たことを追記する。従って今回の紹介は一六四話になる。

表 日本の「猿の生き肝」採録話の対比表

9	8	7	6	5	4	3	2	1	伝承地（採録地）	
									場の設定	理由
「かれいとくらげのいわれ」 青森県下北郡脇野沢村	「クラゲ骨なし」 青森県下北郡佐井村	「蜻の骨抜かれた話」 青森県三戸郡五戸町	「骨なしくらげ」 青森県下北郡佐井村磯谷	「ウサギとトド」 北海道日高沙流郡平取町	「兎機智を以て生胆をとられるのを免れた話」 北海道日高沙流郡門別町	「兎、機智をもって生肝をとられるのを免れた話」 北海道日高沙流郡門別町	「ウサギの胆」 北海道宗谷稚内市	「間抜けトド」 北海道石狩・旭川市近文		
龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	海	海	海	海	海	海	誰の病気がか
乙姫	龍宮様	龍宮様	龍宮様	海の神の妹	海の王様神の娘	海亀の娘	亀の妹	海の神	海	何を（探し求める物）
猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の生き肝	兎の肝	兎の肉	兎の肝	兎の肝	兎の心臓	海	誰が（使者）
くらげ	くらげ	蛙	くらげ	トド	海馬	鯨神の子 （しゅうじんの子）	海馬 <sup>とど</sup>	トド	トド	目的を告げる者
かれいとくらげ	くらげ	たこ （こ馳走役）	くらげ	トド	海馬	鯨神の子 （しゅうじんの子）	海馬 <sup>とど</sup>	トド	トド	途中で戻る
（不明）	岩	（語らない） （逃げる）	岩の岸	木の枝	陸	家	山	家	家	（肝の場所） 言い訳
有	有	有	有	無	無	無	無	無	無	形状
	鯛とスズキらがくらげの筋も骨も砕いて粉にした	肝取り役の鯨が龍宮様に申し訳ないとたこの骨を抜いたので今も骨なし	くらげは肉と骨をばらばらにされて骨なしに	葉になる肝はルルサツサンペで、体のはシッポルポで効き目がない	冗談骨、遊びの肉をもっている。本当の骨、本当の肉は陸にある	海亀は「海の大主」のこと	亀（アダイコロヘンケ）は海を支配する老人			備考 特徴・留意点・その他

20	山形県上山市楯下 「亀の甲羅」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	亀	(ひそひそ話)		松の木	有	亀は岩にぶつけられ甲羅がヒビ割れた。今もそうだ
19	山形県上山市楯下 「タコに骨なし」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	たこ	(語らない)	○	(語らない)	有	鯨が現れ猿が肝をつぶしたので返し、たこは骨を折り骨無しに
18	山形県上山市 「干蛸と干鰯の起り」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	たこといか	(乙姫の話 を聞く)		(語らない)	有	猿はたこといかを岩に叩きつけ天日に干され、干蛸と干鰯になった
17	秋田県男鹿市羽立 「猿の生き肝」	い (語らな)	乙姫	猿の生き肝	フナ	(語らない)	○	(語らない)	有	「フナ」が海にいない由来を語る ※断片的
16	秋田県仙北郡田沢湖町 「猿の生き肝」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	二人の女中	女中達		木の枝	無	龍宮で接待を受ける ※女中らのおしゃべりを聞き知る
15	宮城県登米郡南方町 「猿の生き肝」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	亀	(ひそひそ話)		松の木	無	猿に逃げられた
14	宮城県多賀城市東田中 「猿の生き肝」	龍宮	乙姫の安産	猿の生き肝	亀	くらげ 門番	○	木の枝	有	くらげは皆に骨抜かれた ※乙姫の安産
13	宮城県仙台市富沢 「猿の生き肝」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	亀	くらげ		松の木	有	亀は石を投げられ甲羅が六角、れ骨なしになった
12	宮城県栗原郡若柳町川原 「猿の生き肝」	龍宮	乙姫の安産	猿の生き肝	亀	くらげ 門番		松の枝	有	※乙姫の安産のため
11	宮城県栗原郡高清水町 「クラゲと猿」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	くらげ	くらげ	○	松の木	無	くらげは骨を抜かれ骨なしに
10	青森県西津軽郡木造町 「猿の生き肝」	龍宮城	乙姫	猿の生き肝	わに	わに	○	木の枝	無	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
埼玉県川越市小仙波町 「海月骨無し」	千葉県安房郡 「クラゲ骨なし」	千葉県安房郡白浜町原 「くらげほねなし」	群馬県新田郡藪塚本町 「クラゲ骨なし」	福島県伊達郡梁川町 「猿の生き肝」	福島県福島市 「猿の生き肝」	山形県鶴岡市鳥居飽海 「猿の生肝（海月骨なし）」	山形県酒田市飛鳥 「猿の胆」	山形県西置賜郡白鷹町折居 「猿の胆」	山形県南陽市小岩沢 「猿の生き肝」
龍宮	龍宮	龍宮	海	龍宮城	龍宮	龍宮	(なし)	(なし)	龍宮
乙姫	乙姫	姫	海の殿様の 奥様	乙姫	乙姫	娘	ん 殿様の奥さ	亀のお産	乙姫
猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の肝	猿の生き肝
亀	亀	くらげ	くらげ	亀	亀	くらげ	(語らない)	亀	亀
くらげ 門番	くらげ	くらげ	くらげ	たこ	魚・くらげ	くらげ	くらげ 門番	亀	たこ・えい
○	○	○	○			○	○	○	
木の枝	山	松の木	木	海つばだ	松の木	松の木	(語らない)	木	木の上
有	有	有	有	有	有	有	有	無	有
た	龍王は怒ってくらげの皮をは ぎ骨を抜き、今のようになっ た	八竜王はくらげの皮をむき 骨を抜いた、それから骨なし 抜かれた	くらげは龍宮の殿さんに骨を 抜かれた	たこは骨を抜かれて、骨なし だという	くらげは殿様に抜かれ、骨が なくなつた	くらげは骨も何もすつかり取 られフワフワになった	※龍宮の設定ではない ※くらげの肝を吞ませ、皮を むき海にすてた	※龍宮の設定ではない ※亀が子を産むため	亀は岩にぶつけられ木から落 とされ甲羅が割れ、たこは叩 かれ骨なしに

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
新潟県長岡市麻生田町 「サル」の生きざも	新潟県栃尾市小向 「サル」の生きざも	新潟県新発田市滝谷 「くらげ骨なし」	新潟県五泉市大蔵 「サル」の生きざも	新潟県古志郡山古志村 「くらげ骨なし」	新潟県北蒲原郡安田町	新潟県北蒲原郡豊浦町切梅 「サル」の生きざも	新潟県小千谷市首沢 「サル」のいきざも	新潟県小千谷市朝日 「猿の生きざも」	新潟県東頸城郡松代町 「くらげ」	東京都大田区羽田 「クラゲ骨なし」	埼玉県比企郡吉見町 海底の宮
龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮浄土	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮浄土	龍宮	龍宮	殿
乙姫	乙姫	乙姫	姫	姫	乙姫	乙姫	乙姫	姫	乙姫	乙姫の娘	王女
猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の肝
亀	亀	くらげ	くらげ	亀	亀	亀	亀	亀	くらげ	くらげ	亀
くらげ	(下女) くらげ	くらげ	くらげ	くらげ	くらげ 門番	いか	くらげ	くらげ	くらげ	くらげ (隣室の話 を聞く)	亀
		○	○		○				○		○
松の木	松の木	木の上	松の木	木の上	(不明)	木	松の木	松の木	(干した)	山	(語らない)
有	有	無	無	有	有	有	有	有	有	有	無
なし ※亀の甲羅の由来も語る	くらげは骨抜きにされ今も骨 なし	※由来は言われない くらげは猿に骨を抜かれる	くらげはタイやヒラメに叩か れ殺された※由来は言われない	くらげは子守唄聴かせた罰で 骨をくだき抜かれて骨なし	猿は亀を木から落とし甲羅に ひびが入り、くらげは裁判で 骨を抜かれた	いかは骨抜きにされ、今でも 骨がない	くらげは骨抜きにされ、今も 骨がない	きつくらげは罰で骨抜きにさ れて、今だに骨がない	くらげは叩かれ骨を取られく らりくらり浮く	くらげは魚たちに骨を抜かれ ぶよぶよになった	宮殿の門の所でしゃべってし まう

54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43
新潟県南津市水津 「猿の生肝」	新潟県東頸城郡松代町清水	新潟県西蒲原郡吉田町 「くらげ骨なし」	新潟県中蒲原郡村松町 「サルの子ぎぎも」	新潟県中蒲原郡村松町上町 「猿の子ぎぎ」	新潟県長岡市平島町 「くらげ骨なし」	新潟県長岡市西蔵王町 「サルの子ぎぎも」	新潟県長岡市富島町 「くらげ骨なし」	新潟県長岡市滝谷町 「サルの子ぎぎも」	新潟県長岡市高見町 「さるの子ぎぎ肝」	新潟県長岡市成願寺町 「サルの子ぎぎも」	新潟県長岡市上除町 「こんべ」
龍宮	龍宮城	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮浄土	龍宮浄土	龍宮浄土	龍宮	龍宮	龍宮
姫	王様	乙姫	乙姫	乙姫	姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫
猿の生き肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝
たこ	くらげ	亀	亀	亀	亀	亀	亀	亀	亀	亀	亀
くらげ	くらげ	くらげ	くらげ	亀	くらげ	くらげ	くらげ (めしたき)	こんべ	こんべ	くらげ	こんべ
	○			○							
木	山	松の木	木の枝	(語らない)	木の又	木	松の木	松の木	松の木	松の木	松の木
有	有	有	有	無	有	有	有	有	有	有	有
これは骨なし	たこは猿をひっぱり猿皮がむけくらげの骨をみな抜き、それから骨なし	骨を抜かれ浮いている	くらげは骨をみんな抜かれ、それから骨なしになった	木は猿を抜かれ今のように骨なしに	木は猿を抜かれ今のように骨なしに	木は猿を抜かれ今のように骨なしに	木は猿を抜かれ今のように骨なしに	木は猿を抜かれ今のように骨なしに	木は猿を抜かれ今のように骨なしに	木は猿を抜かれ今のように骨なしに	木は猿を抜かれ今のように骨なしに

〈資料紹介〉日本の「猿の生き肝」

65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	
福井県坂井郡三国町 「さるの生き肝」	石川県小松市今江町 「猿の生肝」	富山県氷見市 「猿のきも」	富山県射水郡小杉町黒河 「海月の話」	新潟県山古志村 「猿の生肝」	新潟県見附市	新潟県石船郡神林村塩屋 「海月骨なし」	新潟県両津市北松ヶ崎 「海月骨なし」	新潟県両津市大川 「海月骨なし」	新潟県岩船郡神林村宿田 「猿の生肝」	新潟県東頸城郡松之山村 「猿の生ききも」	
竜淵(九頭 川)	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮浄土	
雌蛇 (お産)	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	
猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	
雄蛇	亀	亀	くらげ	くらげ	亀	くらげ	龍宮の使い	たこ	亀	河童	
雄蛇	くらげ	亀	くらげ	くらげ	くらげ	(語らない)	門番 くらげ	くらげ	くらげ	たこ 門番	
○	○	○	○	○		○	○				
木の上	松の木	岩の上	山の木	松の木	(不明)	木の頂	家	鳥	松	木	
無	有	有	有	有	有	無	有	有	有	有	
※姥が淵の雌蛇のお産 ※龍宮ではない	乙姫は怒ってくらげの骨を抜いたのでくらげは骨なしになった	※猿の尾が短いわけ、猿の顔が赤いわけを語る	皆怒ってくらげは骨を抜かれてしまい、今でもくらげら	魚らがくらげをひっぱたき骨を全部抜いたので骨なしになった	亀は猿に背中を踏みつけられてひびが入る	※誘う段階で猿が木から降りて来ないのでです。すこ龍宮へ帰る	海月の骨をみんな抜いたから骨がない。 ※坊さんが語る	海月の骨を取って叩き骨なしに ※蜻蛉の猿皮の由来も語る	海月は浮くようになった	猿は亀に木の枝をぶつけた。海月は浮くようになった	みなが怒ってたこの骨を抜いて、今でも骨がない

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66
大阪府高石市高石町 「くらげの骨なし」	三重県志摩郡志摩町 「猿とこじらと亀の話」	京都府山城和束別所 「海月の骨なし」	京都府与謝郡伊根町成ル 「くらげ骨なし」	京都府与謝郡伊根町成ル 「海月の骨なし」	愛知県西尾市鶴ヶ池町 「猿の知恵」	岐阜県大野郡丹生川村 「河童と猿」	長野県上伊那郡辰野町 「サル <span style="font-size: small;">(い)</span> の生きも」	山梨県西八代郡市川大門町 「さるの生き肝」	福井県小浜市下田 「猿 <span style="font-size: small;">(い)</span> の生肝」
龍宮	龍宮	龍宮城	龍宮	龍宮	(海)	龍宮	海	龍宮	龍宮
乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	鮫	乙姫	王様 (大王)	乙姫	乙姫
猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝
くらげ	亀	くらげ	くらげ	くらげ	鮫	河童	くらげ	くらげ	くらげ
くらげ	こじら (海鼠)	くらげ	くらげ	くらげ	鮫	河童	くらげ	くらげ	くらげ
○	○	○	○	○	○		○	○	○
木の上		木の上	陸	丘	木	岩の上	木の枝	木	松の木
有	有	有	有	有	無	無	有	有	有
くらげは罰で臼にひかれ、今のようにどろどろになった	海鼠はいぼだらけにされ、亀は背中 <span style="font-size: small;">(い)</span> に筋がのこる ※乙姫は肝を食へ治る	乙姫や家来らに叩かれ、くらげは骨なしでふわふわ浮いている	くらげは怒られ棒で叩かれて骨なしで軟体になった	けらい共がくらげを袋叩きにし骨抜きにされ骨なしになった	※鮫の背に猿は乗っていく	猿はあけびを河童に投げた ※申年の人間の肝も薬	くらげは大ぜいに叩かれ、今も骨なしでぐにやぐにやして	くらげは骨なしになって、ふわふわわんになった	龍宮は怒り、くらげは皆に骨抜かれ追い出され浮くように

86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
鳥取県気高郡気高町 「猿の生き肝」	鳥取県八頭郡八束町 「猿の生き肝」	鳥取県八頭郡河原町 「クラゲ骨なし」	鳥取県東伯郡関金町明高 「猿の生き肝」	兵庫県美方郡村岡町市原	兵庫県津名郡淡路町岩屋 「猿の知恵」	兵庫県美方郡村岡町味取 「猿の生き肝」	和歌山県伊都郡高野町	和歌山県志摩郡御座村	三重県志摩郡志摩町 「猿と亀と海鼠の話」	大阪府泉北郡取石村 「くらげの骨なし」
龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	ある村	龍宮	海	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮
乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	一人息子	姫	わいの母	お妃	乙姫	乙姫	乙姫
猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝
亀	くらげ	亀	亀	医者	亀	わに	くらげ	亀	亀となまこ	くらげ
亀	くらげ	門番 くらげ	(話をさく) くらげ	医者	亀	わに	くらげ	くらげ	なまこ	くらげ
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(置いた)	(忘れた)	(語らない)	(語らない)	柿の木	木	岩屋	木の枝	(干した)	(語らない)	木の上
有	有	有	無	無	無	無	有	有	有	有
猿は岸から亀の背に石を投げ、甲が割れてあんな形ができた	くらげは亀の甲の上で叩かれ甲がひびがいった	くらげは骨を抜かれ骨がない	猿が泣くので帰らせる猿は木に登り亀に石をぶつける	逃げた猿は大勢の友達と、医者をかきむしって食べてしま	逃げた猿は木に登り、肝は胸の中と言う	肝は病気に効くのは陰干しの肝だと嘘をつく ※逃げた猿は賢い	くらげは骨を抜かれ叩かれ今のように	亀は石を打ちつけられ、海月は鱗に骨を抜かれ今のように	龍王は怒り亀は打たれ甲にひび、なまこは目口なくいぼだらけ	猿は木に登り肝は腹の中とい

97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87
島根県出雲市大社町宇竜 「猿の生き胆」	島根県隠岐郡海士村 「猿の生き肝」	島根県松江市 「海月」	島根県能義郡広瀬町	島根県隠岐郡 「猿の生肝」	島根県隠岐郡知夫村多沢 「さるのきも」	島根県大原郡木次町東日登	島根県邑智郡大和村 「猿の生肝」	島根県邑智郡川本町 「猿の生き肝」	島根県邑智郡川本町 「猿の生肝」	島根県隠岐郡海士町御波 「猿の生き肝」
龍宮	龍宮	龍宮	島	龍宮	(世間)	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮
乙姫	乙姫	乙姫	殿様	乙姫	ん 長者の奥さ	大王	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫
猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝
くらげ	くらげ	亀	くらげ	亀	亀	くらげ	亀	鰹・くらげ 鯛・鮪・	亀	くらげ
くらげ	くらげ	くらげ	くらげ	(別室の話 を聞く)	くらげ (風呂焚き)	くらげ	亀	くらげ	くらげ	くらげ
○	○	○	○			○	○	○		○
松の木	松の木	(語らない)	(虫干し)	柿の木	(干した)	木	松の木	浜の松	松の木	松の木
有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
くらげは叩かれ骨なしに	猿は尻を叩いたので光るようになり、くらげは骨を抜かれ骨なしに	くらげは皮を剥がれ骨を抜かれて、フワフワ浮くようになった	みんながくらげを叩いたので骨がなくなつた	猿は亀に石を投げ六角形の傷が残つた ※亀が王様に報告	くらげはみんなに叩かれ骨がなくなつた ※龍宮ではない	猿はくらげを馬鹿にし叩いたので骨なしになつた	乙姫が縫つたので縫い目が残つた	亀は石を投げられ甲が割れた	くらげはしかられ骨を抜かれた	亀は高い所から落とされ背中が割れくらげは骨を抜かれた

109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98
山口県大島郡東和町長崎 「たこの骨なし」	広島県甲奴郡上下町	広島県甲奴郡上下町 「蛸に骨がない理由」	岡山県阿哲郡哲西町畑木	岡山県阿哲郡哲西町川南 「猿の生き肝」	岡山県阿哲郡哲西町八島 「くらげ骨なし」	島根県八束郡島根町加賀 「広瀬の猿」	島根県八束郡鹿島町手結 「猿の生き肝」	島根県八束郡島根町大芦 「猿の生き肝」	島根県八束郡島根町加賀 「猿の生き肝」	島根県出雲市大社町鶴峠 「猿の生き肝」	島根県出雲市大社町宇竜 「猿の生き肝」
龍宮	(世間)	(世間)	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮城	龍宮	龍宮
乙姫	分限者の娘	分限者の姫	乙姫	姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	乙姫	龍王
猿の肝	猿の肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝
亀	河童	たこ	たこ	家来	くらげ	亀	(語らない)	くらげ	くらげ	くらげ	くらげ
(たこ 門にいた)	河童	(語らない)	たこ	家来	くらげ	くらげ 門番	くらげ	くらげ	くらげ	くらげ	くらげ
○	○	○		○	○		○	○	○	○	○
松の木	(干した)	(語らない)	岡の上	山上の木	松の木	木の枝	山	松の木	(語らない)	木の上	松の枝
有	無	有	無	無	有	有	有	無	有	有	有
魚が集まりたこの背を抜いて 骨がない	猿はずる賢いから、河童はだ まされた ※龍宮ではない	蛸は猿をダンスで海に引きず り込むが失敗し、自分の骨を 焼き渡し骨無しに ※蛸は治 る ※龍宮ではない			くらげは骨を叩かれ骨なしで、 波に漂うようになった	亀は猿の尾をくわえ顔も赤く なり、くらげは骨なしに	※「使者」が誰は語らない		くらげは骨を抜かれ骨なしに	くらげは叩かれ頭がふうなふ うなしている	魚達がくらげを袋叩きにし骨 を抜いたので今も骨なし

119	佐賀県伊万里市 「猿の生肝」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	亀	くらげ		松の木	有	くらげは骨抜きにされ、亀は百叩きの刑で甲羅が割れた
118	佐賀県神埼郡 「猿とくらげ」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	くらげ	くらげ	○	山	有	龍王は罰にくらげの骨を全部抜かせ、骨なしに
117	徳島県浅川西 「海月骨なし」	龍宮城	乙姫	猿の肝	くらげ	くらげ	○	木の枝	無	※くらげは友達も失った
116	徳島県浅川東 「海月骨なし」	龍宮	王様 (乙姫の父)	猿の生き肝	くらげ	くらげ	○	松の木	有	くらげは叩かれて骨なしに
115	愛媛県北宇和郡三間町 「さるの生き肝」	(なし)	乙姫	猿の肝	くらげ	くらげ	○	木の枝	有	猿は尻を叩き赤くなる。くらげは骨なしになり人を刺す
114	愛媛県北宇和郡広見町 「猿の生肝」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	亀	ひらめ 門番		松の木	有	※乙姫とのやりとりあり 亀は叩かれ背に六角のひび、ひらめも叩かれフニヤフニヤになった。
113	愛媛県北宇和郡三間町戸雁 「さるの生き肝」	(なし)	乙姫	猿の肝	くらげ	くらげ		木の枝	有	猿は尻を叩き赤くなり、くらげは叩かれ骨が砕け、怨みで毒で刺すようになった
112	高知県西土佐村 「猿の生き肝」	(なし)	乙姫	猿の生き肝	くらげ	くらげ	○	木の枝	有	海月はへとへとに疲れ、骨がないようになった
111	高知県高知市仁井田 「猿の生き肝」	龍宮	乙姫	猿の生き肝	亀	くらげ 門番		家	有	※乙姫の眼病 ※龍宮で殿様が馳走する。くらげの骨を罰に抜かせて今も骨がない
110	山口県大津豊浦郡 「蛸にはなせに骨がない」	龍宮	龍王の奥方 (妊娠)	猿の肝	亀	たこ 門番	○	松の木	有	※妊娠して猿の生き肝が食べたという。蛸は骨を抜かれ今の姿に

129	128	127	126	125	124	123	122	121	120
鹿兒島県大島郡宇檢村屋鈍 「さるの生き肝」	鹿兒島県大島郡奄美大島 「猿の生きさも取り」	鹿兒島県大島郡 「蝟骨無し」	鹿兒島県名瀬市 「くらげ骨なし」	長崎県諫早市	長崎県佐岐郡郷ノ浦町 「猿の生膽取り」	長崎県佐岐郡郷ノ浦町 「亀が甲らを割られた話」	熊本県阿蘇郡小国町 「クラゲに骨なんかんわけ」	大分県南海部郡蒲江町 「猿の生肝」	佐賀県嬉野市 「その手は食わん」
(大家)	龍宮 (ネリヤ)	龍宮 (根屋)	龍宮 (ネリヤ)	龍宮	龍宮	(ある家)	龍宮	龍宮	龍宮
子 大家の女の	王様	娘	娘	乙姫	乙姫	爺	奥方 (妊娠)	乙姫	龍王
猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生胆	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝
亀	亀	犬(神様の 使い)	くらげ (カマフタ)	亀	亀	亀	亀	亀	たこ
め たことひら	ひらめとく らげ 門番	たこと針ふ ぐ	くらげ	まこ 門番	くらげとな 鱈	(家の前で 人が騒ぐ)	くらげ 門番	亀	たこ
○			○		○	○	○		○
家	山の頂	(語らない)	木の上	(干した)	木	(語らない)	木	岩	木
有	有	有	有	有	有	有	有	有	無
猿は亀に石を投げ甲に模様ができ、たこは臼で挽かれ、鱈は押えられ平らになった	猿は亀を突き落とし甲が割れ、鱈は体半分を切り取られ、くらげは骨を抜かれ今のように	たこは骨を抜かれ、針ふぐは骨を打ち砕かれ針ができた	たこは骨を抜かれ、針ふぐは骨を打ち砕かれ針ができた	※龍宮の王様が怒り家来達にくらげを叩かせたので、骨がなく足も分かれた	※龍宮の王様が怒り家来達にくらげを叩かせたので、骨がなく足も分かれた	罰としてくらげは骨を抜かれ鱈は体を二つに断ち割られた	猿は亀を木の上から池に投げ背が割れ、今も疵が残っている	※妊娠し食べたい かれ今の様に くらげは罰に皮はがれ骨を抜	猿はたこの足を食べて嘲笑する

138	137	136	135	134	133	132	131	130
沖縄県石垣市石垣	沖縄県石垣市登野城 「猿の生肝」	鹿児島県大島郡奄美大島 「亀の甲羅に文様のあるいわれ」	鹿児島県大島郡奄美大島 「亀とひらめ」	鹿児島県熊本郡南種子町 「クラゲの骨」	鹿児島県熊本郡屋久町尾之 間 「猿の生きざも」	鹿児島県薩摩郡下飯村 「くらげ骨なし」	鹿児島県大島郡大和村	鹿児島県大島郡喜界町 「蜻の骨なし」
龍宮	龍宮	海	ネリヤ	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮（ネインヤ）
神	王様	大身（身分の高い人）の娘	姫	乙姫	乙姫	乙姫	姫	龍宮の神の娘
猿の肝臓	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝
亀	亀	亀	亀	くらげ	亀	亀	ひらめ	犬（神様の使い）
たこ	たこ	ひらめとたこ	ひらめ 門番	くらげ	かわはぎ	門番 らげ	ひらめ	たこと針ふぐ
○	○	○		○			○	
陸	陸	（干した）	（干した）	陸	木	瀬のびんた	木の枝	鳥
有	有	有	有	有	有	有	有	有
針千本の3つの由来	※亀の甲羅、たこの骨なし、	猿は亀の背に石をぶつけヒビ入り割れ、皆がたこを臼につき骨なしにし、針千本は骨を体に付け針が千本に	猿は亀を崖から蹴り落とし亀の腰に文様ができ、たこは八つ手に、平目は平叩きされ今のように平たくなった	猿は仲間を連れクラゲを叩き、骨は砕かれ波に浮かべられた	猿は石を亀の背に落とし割り、かわはぎは口をぬわれ今も口が小さい	猿は葛で縛られ落ちて甲にひびが入り、ユスズは頭に碁石が打ち込まれ、くらげは骨を抜かれ骨なしに	ひらめは身を二つに裂かれ赤白になり、目や口が片側だけ	たこは骨を抜かれ、針ふぐは骨を打たれ針だらけになった

149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139
沖縄県那覇市寄宮	沖縄県那覇市松尾	沖縄県那覇市宇栄原 〔猿の生肝〕	沖縄県中頭郡読谷村伊良皆 〔猿の生肝〕	沖縄県中頭郡与那城桃原	沖縄県国頭郡恩納村谷茶	沖縄県石垣市宮良	沖縄県石垣市登野城	沖縄県石垣市新川	沖縄県石垣市白保	沖縄県石垣市白保
龍宮	海	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮
王様	神様	神	姫	神	神の子供	王様	姫	神	王	神様
猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の心臓	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝
亀	くらげ	亀	亀	亀	亀	亀	亀	亀	亀	亀
たこ (門にいた)	くらげ	たこ 門番	亀	たこ	たこ 門番	たこ	たこ	たこ	たこ	たこ
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
木の上	木の下	山	(忘れた)	(語らない)	陸	山	松の木	木	木	陸
有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
骨がない 王様はたこの骨を取ったので	猿は木に登り石でくらげを打ったので骨がなくなった	猿は亀に石を投げ背がでこぼこに、たこは臼で挽かれ骨がなくなった	猿は亀の甲を石で打ち割れ目ができ、頭も尾も引っ込めるようになった	猿は柿の種を亀にぶつけ甲羅が割れ、亀はたこを足で叩き骨なしにした	猿は亀に石を投げ甲がヒビ割れ。たこは臼で挽かれ骨がなくなつた	※亀の甲羅、たこの骨なし、針千本の3つの由来	たこは骨を取られ骨なしに	針千本の3つの由来	※亀の甲羅、たこの骨なし、ふぐに針がある、3つの由来	針千本の3つの由来

158	157	156	155	154	153	152	151	150
沖繩県八重山郡竹富町 「タコに骨がなく、フグの 体に針がある話」	沖繩県宮古郡城辺町 「竜宮王のゆがたい」	沖繩県宮古郡城辺町	沖繩県宮古郡上野村豊原	沖繩県宮古郡上野村大嶺	沖繩県平良市前里	沖繩県平良市池間島 「猿の生肝」	沖繩県平良市池間	沖繩県平良市池間
海	龍宮	龍宮	海	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮	龍宮
王	王様	姫	王様	神の娘	王様	王様	王様	王様
猿の肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝
亀 (応援のフ カ)	亀	亀	亀	たこ	亀	亀	亀	亀
たこ	たこ	蟹とたこ	クルギヤ 門番	龍宮の神	甲いかとた こ	たこ	甲いかとい かとたこ	いか・た こ・クース ミヤ
○		○						
木の枝	アダンの木	木の上	山	木の上	松の木	アダンの木	木	木
有	有	有	有	有	有	有	有	無
差し針が多くなった	亀の甲羅、たこの骨なし、い かと甲いかの手が短い由来	猿達は石や生柿を亀にぶつけ、 たこは骨を抜かれ、蟹は横歩 きにされた	猿が石で亀を打って甲羅が砕 け、介抱されてぎざぎざがで きた	猿はたこを岩に叩き八裂きにな り、見ていた蟹は横歩きにな る	小猿は石を投げ亀の甲にひび、 甲いかとたこは叩かれ今の姿 になった	亀の甲羅、たこといかとクブ ツメの体の由来	亀の甲羅、甲いかといかとた この姿の由来	猿は亀の甲を叩き、いかとた ことクースミヤも少し叩かれ た

164	163	162	161	160	159
「猿の生肝」 沖縄県八重山郡西表島	「猿の生肝」 沖縄県八重山郡伊是名村	「猿の生肝」 沖縄県八重山郡竹富町小浜	沖縄県八重山郡竹富町	沖縄県八重山郡竹富町	「猿の生肝」 沖縄県八重山郡竹富町
龍宮	龍宮	龍宮	海	海	龍宮
王様	神様	神	大統領	魚の王	神様
猿の心臓	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の生き肝	猿の肝	猿の肝
亀	亀	亀	亀	亀 (鱗に乗る)	亀
たこ	めばる(ミ ーバヤー)	たこ	たこ	たこ	たこ
○	○	○	○	○	○
木の上	糞がしたい から	(語らない)	木	山の木	木の枝
有	有	有	有	有	有
針千本の3つの由来 ※亀の甲羅、たこの骨なし、	猿は亀の背中に石を落とした ので甲が割れ、今のようにな った	針千本の3つの由来 ※亀の甲羅、たこの骨なし、	猿は大石を亀の背に叩きつけ たので、割れ目が入ってる	針千本と、鱗の頭が平たい由 来	針千本の3つの由来 ※亀の甲羅、たこの骨なし、

注記・①原文の「りゅうぐう」「龍宮」「竜宮」は「龍宮」に、「くらげ」「クラゲ」「海月」は「くらげ」に、「たこ」「タコ」「蛸」は「たこ」に、表記を統一した。

②「途中で戻る」欄には、亀などの使用者が猿などを龍宮へ連れて行く途中で元の場所に戻って行く展開の話に○印を付した。(龍宮の門まで着いたが戻って行く場合も含む)